

【旧約聖書日課】エレミヤ書 31章15～17節

<sup>15</sup>主はこう言われる。

ラマで声が聞こえる

苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。

ラケルが息子たちのゆえに泣いている。

彼女は慰めを拒む

息子たちはもういないのだから。

<sup>16</sup>主はこう言われる。

泣きやむがよい。

目から涙をぬぐいなさい。

あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。

息子たちは敵の国から帰って来る。

<sup>17</sup>あなたの未来には希望がある、と主は言われる。

息子たちは自分の国に帰って来る。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 1章3～11節

<sup>3</sup>わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。<sup>4</sup>神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。<sup>5</sup>キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。<sup>6</sup>わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。<sup>7</sup>あなたがたについてわたしたちが抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、わたしたちは知っているからです。<sup>8</sup>兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。<sup>9</sup>わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。<sup>10</sup>神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これからも救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。<sup>11</sup>あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 2章13～23節

<sup>13</sup>占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていな

さい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」<sup>14</sup>ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、<sup>15</sup>ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

<sup>16</sup>さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。<sup>17</sup>こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。<sup>18</sup>「ラマで声が聞こえた。

激しく嘆き悲しむ声だ。

ラケルは子供たちのことで泣き、

慰めてもらおうともしない、

子供たちがもういないから。」

<sup>19</sup>ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、<sup>20</sup>言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」<sup>21</sup>そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。<sup>22</sup>しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、<sup>23</sup>ナザレという町に行き住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

## クリスマスのヘロデ【こども説教のために】

ベツレヘムの町の上に星が輝き、マリアとヨセフ、羊飼いら、そして、黄金、乳香、没薬を贈り物として携えて来た占星術の学者らによって、飼葉桶に寝かせられた幼子の誕生が祝われた最初のクリスマスを、一緒に祝うことができずにいた人々が、エルサレムの都にいました。ユダヤの国の王ヘロデと、ヘロデに仕えていた人々です。東の国からはるばる来訪した学者らが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」(マタイ 2:2)と尋ね回っていたので、不安になったのです。「自分のほかに、ユダヤの王がいるのだろうか。自分の息子たちのほかに、ユダヤの王となるために生まれた者がいるのだろうか」と。ヘロデは、学者たちに「その子」のことを探させました。ところが、学者たちは、星に導かれてベツレヘムの町に幼子を見つけましたが、その子のことをヘロデに知らせませんでした。ヘロデの不安は、大きな怒りに変わりました。ヘロデは、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させたのです。ただ、飼葉桶に寝かせられていた幼子は、主の天使がヨセフの夢に現れてエジプトに逃げるように告げていたので、無事だったのです。

クリスマスに、悲しく辛い出来事が起こっていました。クリスマスの御子は、この悲しく辛い出来事を御身に背負って、生きて行かれたのです。

## この幼子と共に

教会は、ご降誕の祝いのうちに、新しい「主の年」を迎えました。クリスマスにお生まれの御子、主イエスと共に歩むようにと定められた「主の年」です。「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(マタイ 18:3)とお教えになられた主イエスは、幼子としてお生まれになられ、歩みを始められました。新しい「主の年」を、わたしたちは、クリスマスの幼子と共に歩み始めます。心を新たにして、幼子イエスと共に、幼子の一人となって、新しく歩み始めるのです。

新年早々、めずらしく夢を見ました。試験が間近なので準備をしなければと、何かを探しているのです。現れてくる人に次々に尋ねていったら、ようやく、試験科目のテキストらしきものを出して見せてくれる者が現れたのです。見ると、表紙に英語のタイトルが書かれています。どうやら英語の教科書ようです。それを見て安心したところで、目が覚めました。こんな夢は、学生時代にも見たことがありません。毎日、我が家の大学生たちの様子を見せられているからでしょうか。本人たちには、親がこんな夢を見たということは話しませんでした。主の天使の御告げならば、親として何か行動を起こすべきでしょうか。

夢で目覚めた日、年始の挨拶に母の家を訪ねてきました。兄弟たちが互いに子らの成長を確かめ合ってきた年に一度の集まりです。そこで、久しぶりの新顔と初顔合わせをしてきました。弟の家庭に生まれて1歳になったところの甥です。大勢の大人の中に一人、ようやく歩けるようになったばかりの幼子の存在感は、決して小さなものではありません。忘れかけていた「幼子がいる生活」を思い出させてくれました。

はじめて幼子を迎えたヨセフとマリアは、大変だったに違いありません。彼らは、二人だけで子育てを始めたのです。親類縁者のいる故郷ナザレを離れて、わざわざベツレヘムで生み、育て始めました。しかも、彼らは、すぐにその地も発たなければならなくなりました。そして、エジプトに移住したのです。幼子を抱えての移住は、どんなにか大変だったことでしょう。慣れない土地で、慣れない初めての子育てです。頼れる人も限られていたに違いありません。

それでも彼らがそうしたのは、主の天使がそう告げたからでした。夢に現れた主の天使が、その幼子と共にいるようにと、繰り返しヨセフに促し、励ましたからでした。母親となったマリアと、マリアの生んだ幼子を、迎え入れなさい、そして連れて行きなさいと、主の天使は、ヨセフに繰り返し告げたのです。この幼子と共に行くこと、この幼子と共にある者と共に行くこと。クリスマスの天使は、繰り返し、そのことを告げているのです。

## 夢も悪夢も

昨年この時期、新年を迎えたばかりのわたしたちは、暗澹たる思いに覆われていました。元日の能登半島地震、二日には羽田で航空機事故と、昨年この国の社会の混乱を暗示するような出来事が、続いていたのです。今年は、どうでしょうか。わたしたちの周囲で大きなことが起こっていないとしても、世界に目を向けるならば、わたしたちの心を不安にさせる出来事は、絶え間なく続いています。世界中の教会がクリスマスをお祝いという期節が訪れても、紛争は止むことがなく、戦闘が続けられています。人の命が軽んじられ、多くの幼子の命が奪われ続けています。

「幼子と共にいる」。このことを拒む者が、少なくないのです。

福音書の降誕物語の中で語られる「ヘロデ」は、今も、世界中にいるのです。「ヘロデと共にいる」ことを選び、「幼子と共にいる」ことを選ばない。そういう者は、少なくないのです。

ヘロデは、もちろん、初めから「幼子」を目の敵にしていたわけではなかったでしょう。気にも掛けていなかったことでしょう。ただ、不安に駆られたのです、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と問われて。その「幼子」が、いずれ自分の地位を脅かす存在になるかもしれない、と不安になったのです。実際にはあり得ないことだとしても、不安を拭えなくなったのです。その存在を確かめないわけにはいけなくなりました。その幼子を探して旅して来た学者たちに確かめさせ、不安を払拭しようとしたのでしょう。分からなかったものの正体ははっきり分かるだけで、わたしたちの不安の大半は解消するのです。ところが、幼子を探し当てた学者たちは、ヘロデに報告することなく、去って行ってしまったのです。ヘロデの不安は、解消するどころか、怒りへと燃え上がってしまったのです。

クリスマスの悪夢です。星の示す「幼子」の誕生がなければ、ヘロデが男児殺害の命令を発することはなかったでしょう。けれども、これが、現実なのです。クリスマスにわたしたちが見ている、この世界の現実なのです。

クリスマスの幼子は、そのような現実の中、生き長らえさせられた一人なのです。なぜ、この幼子なのか。他の幼子ではないのか。その答えを、わたしたちは、知りません。幼子は、幼子に過ぎないからです。どの幼子が将来救い主になると、どうして知り得ましょう。けれども、その幼子は、生かされたのです。クリスマスの悪夢の中、夢に現れた主の天使に励まされた者たちの手に委ねられて、その幼子は、生かされたのです。

この幼子と共に、ヨセフは旅を続けました。この幼子と共にいる者、マリヤと共に、歩み続けました。そこに「幼子」が与えられていたからです。

わたしたちも、互いに託された「幼子」と共に、歩み続けるのです。